

H28年 1月

くすぐられるとこそばゆい。もっとくすぐると飛び出すように、走り逃げまわる。そして、もうくすぐられはせんぞ、と言わぬばかりにこっちを向いて余裕のあるところを見せる。そこで、こちらが知らん顔していると、むこうがくすぐりにやってくる。主客がかわってこちらが逃げると、すごい勢いで追いかけてくる。「参った。降参。」と、あやまるとケラケラ笑ってやめてくれる。

成功感のようなものだろうか？ それとも、いばっているのだろうか？ この幼い子たちは、そんな安っぽいことを考えているわけではない。もっと人間らしい品位があるのだ。大人は下卑ているから、それがわからない。

おもしろがって、くすぐりっこをすれば、相手になってこどもは遊んでくれるだろうけれど、ゲラゲラ笑いこけた後のこどもの顔は、品位が抜けている。大人が抜いてしまったのである。

引っこむ ことと 出る ことをわきまえるのは、人間らしい品位というものではないか。神は、三才の幼児にそのことを備えさせている。

ひっこむ子でも出る力をもっているが、出る子の中にはひっこむことを忘れるのがある。才能とか知能とかは前に出るが、品位や徳は前に出ない。人間らしいのは、才徳兼備である。多くの子は、そのように備えられているのに、たいてい片輪にそだってしまいがちである。

徳 や 品位 という内省力がともなわない才幹知能は、浅くみすぼらしい。世の中の大人たちを見れば、一見してわかる。

逆に、いくら人柄がよくとも、前に出る力を磨かないものは、閉ざされた自分だけの中に引きこもる外はない。

子どもは本来、この“でる”と“ひっこむ”のコントロールに生命をかけていると見るべきである。出ることばかりの子にがまんを教える母親はすばらしい。引っこむ子に、根気をかけて小さなチャンスを与える母親でなくてはならない。しかも出ると引っこむによって人間のよりすばらしい未来をめざめさせようと努めなくてはならない。

これは、人生の目的につながるのだから、われわれ自体が、自分をそのように開拓して修めていなければ、できない相談であろう。 — 福山すすむ —

(わかいめだより 104 S54年9月)

“どこを出して、どこを引っこめるか”は、私達のデッサン研究にそのまま当てはま

るように思います。

石膏像に向かうと、初めは新鮮な気持ちで描き始めるのですが、まもなく長年の慣れたモノ、癖、褒められた点、成功歴などのさまざまな概念が支配してきます。この概念の妨害の中で、自分が見ようとしているのは何なのかを掘り出そうと苦心するのです。新人なら概念なく臨めるかと言うと、そうとばかりも言えず、少しでも“上達”したい気持ちが、どこかで見た上手いデッサン、優秀作品という目標に自分を向かわせてしまったりします。新人も旧人も、概念から脱却して新しい視点を持つべく、描いては消し消しては描き、時々並べあって目で見直す。

しかしまた、新しくなりたい——この気持ちが白熱してくると、今度は“新しい”ことだけが目標だと思ってしまう。自分で画面を味わうこと、感ずることを素通りするのです。

この教室では、毎年新年4日が描き初めのデッサン会となっています。誰が言い出したか・・・？もう20年あまりになるのではないのでしょうか。4日は仕事始めのところもあるし、まだ家族との予定もある頃なので、大体レギュラーメンバーに加えて都合のつく方々で15～6名が、朝10時から夕方4時頃までを過ごします。

今年のデッサン会では、“第一義”“一義的”という言葉が印象に残っています。

(\*根本の意義・第一義的であること / 最も重要な意味であること)

人はさまざまな物事に支配される要素をもっているようです。最もそうした概念によって成長している自分自身であるのも事実です。だからこそ、自分が素晴らしくあるための 出る—引っこむ を見続け開拓し続ける必要がある、と言われているような気がします。

去年は、いつにも増して催しごとや出来事の多い年でした。その都度ご理解とご支援ご協力を賜りありがとうございました。本年もまたどうぞ宜しくお願い申し上げます。

